

非対格主語の「が」格省略：影山（1993）vs. 高見・久野（2006）

著者	赤楚 治之
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	25
号	1
ページ	1-12
発行年	2013-10-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000456

非対格主語の「が」格省略： 影山（1993）vs. 高見・久野（2006）*

赤 楚 治 之

Abstract

This paper discusses the issue of the deletion of Nominative case marker *-ga* of unaccusative verbs. Kageyama (1993) claimed that the case marker can be deleted when used with unaccusative verbs, but not when used with unergative ones, which shows that the subject of former stays within VP, instead of raising to Spec, TP, and this results from the *epp* property of T. Functionalists such as Takami & Kuno (2006) criticized Kageyama's syntactic approach, presenting counter-examples to show that the deletion at issue cannot be explained syntactically, but can be explained by functionalist approach. I suggest that the example sentences used in both Kageyama and T & K are ones which are easily influenced by discourse/pragmatics factors. Based on a reanalysis with unambiguous sentences, I claim that Kageyama's syntactic analysis is valid.

Keywords：日本語, 「が」格, 省略, 非対格動詞, 形式名詞

1. はじめに

日本語の文法関係を担う助詞（＝格助詞）は口語体では省略されることがよくある。この小論で考察を試みるのは、その中の主格を担う「が」であるが、さらに言えば、自動詞に現れる「が」であり、他動詞文のそれではない。近年の言語学の成果により、自動詞はさらに二つに下位区分されることがわかってきている。一つは「走る」「泣く」「遊ぶ」などの非能格自動詞（*unergative verbs*）で、もう一つは「来る」「倒れる」「落ちる」などの非対格自動詞（*unaccusative verbs*）である。簡単に言えば、前者は、その主語にあたるものが意図性を有するものであり、後者はそれがないものである。

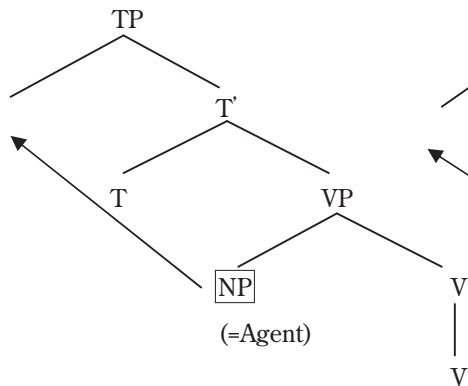
この仮説が日本語で検証しはじめられたのは1980年代の後半であるが、それを受けて影山（1993）が「が」の省略に関して、非能格動詞と非対格動詞の間に違いがあると指摘した。非能格動詞文では問題の「が」は省略できず、非対格動詞文では省略できるという指摘である。この仮説は後に批判を受けることになるが、それは主に、機能主義的アプローチによる研究者からのものであった。この小論では、その代表として高見・久野（2006）を取り上げ、影山（1993）の仮説の妥当性を検討するのが目的である。

2. 影山 (1993)

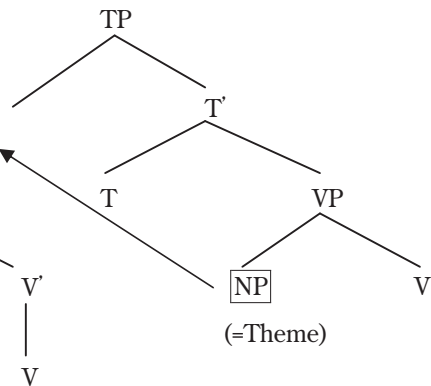
統語的には自動詞は非能格自動詞と非対格自動詞に大別できるが、これは70年代にPerlmutterがアメリカインディアンの言語を関係文法で分析している時に提案した考えである。その後、この重要な発見は、生成文法で取り上げられ、80年代に世界の様々な言語で検証されることになった。その背景の一つは、80年代当初に開発されたGovernment & Binding理論（GB理論：後にPrinciples & Parameters理論（PP理論）の名称が一般に用いられるようになった）の持つ普遍的な統語構造の設定が挙げられる。日本語も例外ではなく、80年代後半から90年代前半の研究によって次から次へと、非対格性示す統語的証拠が明らかにされた。代表的なものとしてはMiyagawa (1989) の数量詞遊離が挙げられる。

非対格動詞の主語（非対格主語）は、次の(1b)に図示されているように、その意味役割はThemeであり、D構造においてはVのsister関係に位置する場所にある。他方、非能格動詞の場合（(1a)を参照）は、主語（意味役割は典型的には動作主）はVPの指定部にmergeされる。（VP内主語仮説）。両者とも、その主語が、S構造では、Tの持つEPPの特性によって、TP指定部に移動するというのがGB理論の標準的な分析であった。

(1) a. unergative sentences



b. unaccusative sentences



それに対し、影山（1993）では、それが日本語には当てはまらないという主張を展開した。影山（1993）によれば、日本語の非対格性は、D構造のみならず、S構造でも成り立つという。つまり、非対格動詞の(1b)においては、矢印の移動がなく、D構造と同じくS構造においても主語のNPはVのsisterの場所に留まるという分析である。これを影山は「表層構造での非対格性」と呼び、その証拠として、次の4つの事例を挙げている。

- (2) a. 格助詞「が」格の省略
b. 総称PROの生起
c. 間接受身

d. 使役受身

(2a) は本稿で議論する現象であるので、後で詳しく見ることになる。(2b) は、Kuroda (1983) で取り上げられたものであるが、従属節における総称の PRO が、「PRO 子供を育てるのは難しい。」と「*親が PRO 育てるのは難しい。」の違いに見られるように、人間一般を意味する総称の PRO は、他動詞構文の目的語位置には生じることができない。同様に、非対格動詞の主語にも、総称の PRO は現れないという現象である。（「*夜中に PRO 現れることがよくある。」）(2c) は、「*私はおじいさんに転ばれた。」のように、外項のない非対格動詞は、間接受身の動作主「～に」になれないという観察である。(2d) は、自動詞が使役受身文で用いられると、非能格動詞の場合は文法的である（「子供がジャンプさせられた。」）が、非対格動詞の場合は非文となる（「*水が蒸発させられた。」）という。これらの現象は、影山（1993）によれば、非対格動詞の主語が表層（S 構造）で TP 指定部（いわゆる主語位置）に移動しているならば、他動詞や非能格動詞の主語と同じような振る舞いをしなければならないにもかかわらず、そのように振る舞わないということは、表層においても主語 NP が VP 内に留まっていることを示している。

影山（1993）は、このような証拠を挙げているわけだが、本研究では、もっとも信憑性が高いと思われる (2a) の「が」格の省略だけを取り上げ、その他の現象については今後の課題としたい。

日本語における助詞は、二つに分けられる。文法関係を示す格助詞（case marker）と、英語の前置詞に相当する後置詞（postposition）である。主として口語体において前者は省略されることがあるのに対して、後者は省略ができないことはよく知られている。

- (3) a. 太郎が 花子から 本を もらった。
b. 太郎（が） 花子 *（から） 本（を） もらったよ。

しかしながら、格助詞がどれも同程度で省略できるわけではない¹⁾。

影山は、一般的な他動詞構文においては、主語よりも目的語の方が省略されることを次のような例文を用いて明らかにしている。

- (4) あの女性（ ） 知っているのは 誰ですか？

(4) の括弧内は、論理的には、「を」でも「が」でも、どちらが入ってもかまわない。それぞれの助詞が復元された場合の解釈を英語で示せば次のようになる。

- (5) a. Who knows the lady? ←「を」が入る場合
b. Who does the lady know? ←「が」が入る場合

しかしながら、この文を聞いた日本語母語話者はほぼ 100% が、「を」が省略されている解釈を

とる。これは日本語においては「が」よりも「を」の方が省略されやすいことを示している。生成文法では、統語的に、目的語は動詞（V）の *specifier* の位置にあるものと考えられている。それを踏まえて、影山（1993）は次のような二つの自動詞グループのデータを掲げる。

(6) 非対格動詞：

- a. [顔にご飯粒__ 付いている]の知ってる？
- b. [交通事故__ 起こる]ところ見たことある？
- c. あの子供, [何度でお湯__ 沸く]か知らない。
- d. [田中さん__ 亡くなった]の知らなかった。
- e. テレビのニュースで [タンカー__ 沈没する]ところ見たよ。
- f. 昨日, [火山__ 爆発する]の見たよ。

これらの文ではいずれも「が」格が省略されても問題はない。ここで用いられている動詞は非対格動詞である。それに対し、非能格動詞の場合、影山は次のような判断を示している。

(7) 非能格動詞：

- a. ?*[子供達__ 騒ぐ]の見たことない。
- b. ?*[患者__ あばれた]の知ってますか？
- c. ?*[田中君__ 仕事する]の見たことない。
- d. * テレビで [中核派__ デモする]の見たよ。
- e. * [教え子__ 活躍する]のを見るのは楽しい。

先の非対格動詞のグループと比べると、容認性が落ちるという判断であるが、論者を含め、この判断には、（それぞれに対し微妙な判断の違いは存在するものの）基本的に同調する人は多い。このような省略可能性に見られる違いから、影山（1993）は次のように分析した。もし、非対格動詞の主語がS構造でTP指定部に移動しているとすれば、非能格動詞の主語とは区別がつかず、「が」格の省略に関しては違いがないと判断されるはずである。が、実際には上の（6）のデータが示すように、非対格主語だけが「が」格の省略を許す。これはS構造においても主語がVP内に留まっていることを示しているというのが影山（1993）の分析である。

3. 高見・久野（2006）

前節で見た影山（1993）の統語的な分析に対して、竹林（2004）やLee（2002）などの機能主義的アプローチを承けて、高見・久野（2006）は機能主義統語論の観点から代案を提案している。

高見・久野が先行研究から引用する影山への反例を取り上げることから始めよう。彼らは次の三点から反例を提出している。(i) 他動詞の主語をマークする「が」が省略される場合、(ii) 非

能格動詞の主語をマークする「が」も省略される場合、そして (iii) 非対格動詞の主語をマークする「が」が省略できない場合、の3点である。それぞれの例文を下の (8) から (10) に挙げる。

(8) 他動詞の主語

- a. 社長、[今年いっぱい山田さんが会社を辞める]って本当ですか？
- b. 社長、[今年いっぱい山田さん__会社を辞める]って本当ですか？
- c. ねー、[住宅公団にローンを申請しないで山田さんが家を新築した]の知ってる？
- d. ねー、[住宅公団にローンを申請しないで山田さん__家を新築した]の知ってる？

以上の例文は、従属節の他動詞の主語が省略されているが、適格と判断される。

(9) 非能格動詞の主語（竹林（2004）からの引用）

- a. [向こうで子供達__騒いでる]の知ってる？
- b. [昨日もまた例の患者さん__あばれた]こと、ドクターに伝えました？
- c. [田中君__仕事してる]の、どの会社？
- d. この間、テレビで、[どこかの学生さんたち__デモしてる]の見なかった？
- e. この間、試合に行って、[彼__活躍する]とこ見てきたよ。

(9) の例文は、(7) とまったく同じ非能格動詞が用いられ、文が表す内容もきわめて類似しているにもかかわらず、適格と判断される。

(10) 非対格動詞の主語

- a. このポットが一番のセールスポイントは、[ものの数分でお湯が沸く]ことです。
- b. ??このポットが一番のセールスポイントは、[ものの数分でお湯__沸く]ことです。
- c. [ソウルに教会がたくさんある]のは世界的に有名だよ。（竹林（2004）から）
- d. ??[ソウルに教会__たくさんある]のは世界的に有名だよ。
- e. [阪神タイガースに赤星がいる]ことも知らないの？
- f. * [阪神タイガースに赤星__いる]ことも知らないの？
- g. [自分より先に子供が先立つ / 死ぬ]のは、とても淋しい。
- h. * [自分より先に子供__先立つ / 死ぬ]のは、とても淋しい。
- i. [熱でダイヤモンドが溶ける]なんて考えられない。
- j. * [熱でダイヤモンド__溶ける]なんて考えられない。

(10) の各文における従属節の動詞は主語指示物の非意図的事象や存在を表す非対格動詞であるが、「が」格を省略した文 (10b, d, f, h, j) はきわめて不自然で、不適格と判断される。

このような言語事実から、高見・久野は、従属節において、他動詞の主語と非能格動詞の主語をマークする「が」は省略できず、非対格動詞の主語をマークする「が」は省略できる、という一般化には問題があることを指摘し、この点から「が」の省略の適格性を左右している決定的要因は非対格性ではないと結論づけている。

さらに、高見・久野 (2006) は竹林 (2004) と Lee (2002) の機能主義的な代案を検討し、それらにも問題があることを論じ、高見・久野独自の機能主義的な分析を試みている。高見・久野 (2006) の要点は、(従属節における)「が」の省略は統語論的に決まるものではなく、発話のモードと情報の新旧度・重要度といった機能的に決まるものであるとするものである。これらの二つの要素とは大まかに記述すると次のようなものである。

(11) a. 発話のモード (臨場感)

文全体が目に見えるシーンなどを私的感情 (驚き、意外感などの感情) を込めて述べること。(高見・久野 (2006: 204))

b. 情報の新旧度・重要度

主語が表す情報の新情報性・重要度が、述部が表す情報の新情報性・重要度より高くないこと。(高見・久野 (2006: 204))

高見・久野によれば、これらの条件は「が」格の省略のみならず、「は」格の省略にも当てはまる一般的な制約であるという。

高見・久野は、これらの制約によって、影山 (1993) では説明できない、省略の可否が説明できるとしている。

(12) a. * [阪神タイガースに赤星__ いる] ことも知らないの？

b. * [自分より先に子供__ 先立つ / 死ぬ] のは、とても淋しい。

c. * [熱でダイヤモンド__ 溶ける] なんて考えられない。

これらの文には臨場感がなく、さらに (12a) では、「阪神タイガースに誰がいるか」が問題となっているため、「赤星」の方が「いる」よりも重要度の高い情報を表しているために「が」の省略ができない。(12b) では、従属節が、抽象的、客観的な一般的事実の陳述を行っているため不適格だと考えられる。仮に、子供を失った母親の次のような発話なら、感情のこもった、「私的」陳述性が高まるために、「が」格の省略がほぼ容認される。

(13) [自分よりも先に私の子供__ 死んでしまっ] て、もうどうしていいかわかりません。

（12c）は、話し手が単に頭で考えて行っている文だと解釈すれば臨場感がないために、「が」格の省略はできないが、話し手が、実際にダイヤモンドを解けるのを目撃して言っている文だと解釈すれば、臨場感の条件から、「が」を省略した場合、適格な文になる。

竹林（2004）が挙げた反例も同様に説明できると高見・久野はいう。

- （14） a. ??このポットの一番のセールス・ポイントは、ものの数分でお湯__沸くことです。
b. ??ソウルにたくさんの教会__あるのは世界的に有名だよ。

（14a）では、ポットの客観的特性を私的感情を交えないで述べる文であるため、「が」の省略を促す私的発話性、感情的発話性（＝臨場感の条件）と相いれないために不適格となり、（14b）では、文全体が表す周知の事実と、私的、感情的情報との矛盾によるものだと説明している。

- （15） a. 社長、[今年いっぱい山田さん__会社を辞める]って本当ですか？
b. ねー、[住宅公団にローンを申請しないで山田さん__家を新築した]の知ってる？

高見・久野によれば、「今年いっぱい誰が会社を辞めるか」、「住宅公団にローンを申請しないで誰が家を新築したか」の答えならば、「が」を省略することはできないが、これらが、「今年いっぱい山田さんがどうするか」、「住宅公団にローンを申請しないで、山田さんがどうしたか」に対する答えならば、省略が可能となる。これは、山田さんの持つ新情報性・重要度が「会社を辞める」、「家を新築した」よりも低くなるためである。

このように、影山（1993）では説明できない種の例文は、（11）の二つの機能的な制約によって説明できると高見・久野は主張する。

4. 考察

本節では、前節で見た高見・久野（2006）の「が」省略の機能主義的な代案を用いた説明の問題点を指摘する。その後、彼らの主張する談話・pragmaticsの影響を極力排除した場合にどのようなことがわかるのかについて議論する。

4-1. 高見・久野（2006）の弱点

まず何よりも問題となるのは「臨場感」の定義であろう。高見・久野はこれを「ある事柄や事実を、話し手の驚きや不確かさ、意外感など、私的感情を交えて、話し手自身の「生の」感覚として提出する（話し手が文の表す内容を「私的に」、自己の感情、感覚を投影して表現する）」と説明している。そして、臨場感に関係する一つの要因として終助詞を挙げている。次の（16）がそのことを示している例である。

- (16) a. 昨日, 太郎君 が/*は 来た。
 b. ??昨日, 太郎君__来た。
 c. 昨日, 太郎君__来たよ。
- (17) a. 今朝大きな地震 が/*は あった。
 b. * 今朝大きな地震__あった。
 c. 今朝大きな地震__あったよ。

(16c) と (17b) において, 「よ」を付加することで, 話し手の「生の」感情表現として解釈されるため, 「が」格が省略されても適格文になるという。しかし, 通常, 終助詞は, 主文について談話的機能を付加させるものであり, 「臨場感」と直接的な関係はないと理解するのが自然ではないだろうか。

同時に, 情報の新旧度・重要度の概念も曖昧なものと言わざるを得ない。例えば, (18) の例である。これは, 従属節中の「が」格省略ではなく, 主文における「は」の省略を取り扱ったところであるが, 高見・久野は, 「が」の省略も「は」の省略も, 統語的な出現環境には関わらず, 基本的に同じ機能的説明(つまり, 臨場感と情報の重要度)が機能していると考えているので, この例を用いても問題は起きないであろう。

- (18) A. 太郎君, 花子さん, お元気ですか。
 B. *太郎__元気ですが, 花子__ちょっと体をこわしています。

高見・久野によれば, (18) の B において「は」が省略できないのは, 対照の「は」が用いられていることから, 「太郎」の方が述語の「元気です」よりも, 新情報度・重要度という点において高い情報であるので, 「は」が省略されないと説明している。しかし, 次の例はどうであろうか。

- (19) a. 太郎は元気ですが, 花子__ちょっと体をこわしています。
 b. *太郎__元気ですが, 花子は__ちょっと体をこわしています。

(19) は, それぞれ, 片方を「は」を省略したものである。それぞれの持つ情報度・重要度に変化があるとは考えられないが, 論者の小規模調査では, (19a) が OK である一方, (19b) は容認できないとする結果であった。このような判断の非対称性はさらなる検討が必要であることを示唆しており, 高見・久野のいう機能的説明は不十分であることを示しているように思える²⁾。

4-2. データ再考

以上, 簡単ではあるが, 高見・久野(2006)の持つ弱点を見てきた。しかし, 注意しなければならないのは, 確かに彼らの機能主義的説明には弱点はあるものの, 彼らが示している反例は確かに存在するという動かし難い事実である。データによっては多少彼らが示す容認性・文法性と

違いが感じられないこともないが、彼らの判断と大きく隔たるところがない。つまり、やはりそこで提示されている反例は反例として受け入れざるを得ないと言える。しかしながら、そのような反例があるからと言って、影山（1993）のいう「表層の非対格性」そのものを否定するということにつなげてゆくのはいささか性急すぎるように思われる。

もし、仮に高見・久野が提案する機能主義的な説明が正しいとするならば、これらの文には、談話的・pragmaticな要因が入り込む余地がある構文であることになる。そこで、高見・久野のデータの基になっているのは影山のデータである。ここで、そのデータを再録し観察してみよう。

(20) 非対格動詞：

- a. [顔にご飯粒__付いている]の知ってる？
- b. [交通事故__起こる]ところ見たことある？
- c. あの子供、[何度でお湯__沸く]か知らない。
- d. [田中さん__亡くなった]の知らなかった。
- e. テレビのニュースで [タンカー__沈没する]ところ見たよ。
- f. 昨日、[火山__爆発する]の見たよ。

(21) 非能格動詞：

- a. ?*[子供達__騒ぐ]の見たことない。
- b. ?*[患者__あばれた]の知ってますか？
- c. ?*[田中君__仕事する]の見たことない。
- d. * テレビで [中核派__デモする]の見たよ。
- e. * [教え子__活躍する]のを見るのは楽しい。

これらの例を観察した時に気づくのは、連体修飾節の主要名詞 (head noun) が「の」と「ところ」が使われているという点であろう。影山（1993）は、主節におけるトピックの「は」の省略と区別するために、それが現れない連体修飾節の中で「が」格の省略可能性を調べている。よく知られているように、日本語の連体節は、英語の関係節ではとらえられない修飾節と主要名詞との関係が見られるが、問題となっているのは非対格と非能格といった自動詞で、かつ項である主語（つまり、「が」格名詞）がその節中に現れるものなので、必然的に「Gapless関係節」と呼ばれているものがデータとなることになる。これは、ごく単純化して言えば、同格を示す連体節のことである。（例：「太郎が転んだ可能性」など。）さて、ここで注意したいのは、主要名詞の持つ「名詞らしさ」という視点である。

「こと」や「の」、「はず」などは日本語学では形式名詞として知られているものである³⁾。連体節や修飾語を受け、名詞としての機能を果たすが、それら自身には意味がないものであるために、ときに文法化が起きることが指摘されている。(22)においては形式名詞「こと」が「ことになっている」という複合助動詞として文法化している。

- (22) 明日の研究会の司会は太郎が引き受けてくれることになっている。

文法化している証拠として加藤(2010)は「が・の」交替ができないという事実を指摘している。

- (23) *明日の研究会の司会は太郎の引き受けてくれることになっている。

加藤(2010: 38)は、この文法化を「主節であることをやめて助動詞という機能辞になり、従属節が主節になった」という点から「非節化 (declausalization)」と呼び、「文全体の中では従属節が主節に格上げされて (=主節化)、従属節が存在しないことになり (=従属節消去)、複文であったものが単文となる (=単文化)」となると見る。

このような非節化が形式名詞の場合に起きるのは、やはり形式名詞が実質的な意味を持たずに、それ自体が背景化されることによるものと考えられる。本稿で問題になっている関係節の主要部名詞として用いられる形式名詞の「の」や「こと」もまた、主節と関係節との境界を曖昧にするものと考えられないであろうか。もし、これが正しいとすれば、これらの形式名詞を主要部名詞とする関係節は、主節からの影響を受けやすくなると考えるのも決して突飛な見方ではないだろう。言い換えると、主節と従属節との境界が弱まることによって、本来主節に課せられるべき、談話的・pragmaticな要因がその節の中に入り込みやすくなる。

ここでは、これ以上、非節化について議論するのではなく、談話的・pragmaticsの要因を極力、排除した場合にどのようなことが見えてくるのかを探ることに進みたいと思う。そのためには、形式名詞を用いない、通常の関係節(自動詞なので、Gapless関係節になる)を作例することが重要となる。そこで、論者は、次のような、形式名詞を用いない関係節を作例した⁴⁾。

- (24) a. 太郎は、花子__すべった 大学を 受けるんだよ。
b. 太郎は、花子__卒業した 大学を 受けるんだよ。
c. あの子は、 醤油__ついたセーターを 着てるね。
d. あの子は、 花子__編んだセーターを 着てるね。
e. 田中さんは、花子__こけた場所で つまずいたんだってさ。
f. 田中さんは、花子__走ったグラウンドで 練習したんだってさ。
g. 田中さんはね、生徒__倒れた公園に行ってみたんだって。
h. 田中さんはね、生徒__遊んだ公園に行ってみたんだって。

ここでは、「すべる」、「付く」、「こける」、「倒れる」が非対格動詞で、「卒業する」、「編む」、「走る」、「遊ぶ」が非能格動詞である。これらの文の判断を言語学を研究する5名に尋ねてみたところ、結果は次の通りであった。

(25) 5名による文法性の判断

	a	b	c	d	e	f	g	h
A	OK	OK	OK	*	OK	*	OK	*
B	?	*	OK	*	OK?	*	OK	*
C	OK	*	OK	*	OK	*	OK	*
D	?*	*	OK?	*	*?	*	OK?	*
E	OK	OK	OK	*	*	*	OK	*

(24a, b) の判断についてはブレは見られるが、全体的には、やはり非対格動詞と非能格動詞との間には差があると考えてよいのではないだろうか。

5. まとめ

日本語の非対格主語はD構造でもS構造でもVP内に留まったままであると主張した影山（1993）の重要な論拠の一つである「が」格の省略について考察を行った。この主張に関しては、高見・久野らが、機能主義的アプローチから反例を示し、統語論的には説明できないことを主張している。本稿では、彼らの提出した反例が我々の言語直感に合致していることを認めた上で、議論の対象になっている構文に注目した。トピックの「は」の省略との混同を避けるために、影山は従属節の中で非対格自動詞が用いられるデータを採用して議論を組み立てたが、その場合、「の」や「こと」といった形式名詞を修飾するデータを扱っていた。おそらくは口語の感じをより強く出すための方策であろうと思われる。しかし、これらの主要名詞は名詞らしさが低く、その分、談話的・pragmatic的影響を受ける可能性が高く、それが機能主義者たちのような反例を招く結果になっているものと考えた。それを承けて、普通名詞が主要名詞になるような文を用いて調査をしたところ、非対格動詞と非能格動詞の間に容認性の差が見られることがわかった。このことは、「が」格の省略には、高見・久野らの主張するような談話的・pragmaticな要因ではなく、統語的理由が関与していることを示すことになる⁵⁾。

* この小論を今春定年退職された石川輝海前外国語学部長へ捧げる。なお、本研究は名古屋学院大学研究奨励金（2013年度）による成果の一部である。本稿の準備段階で原口智子氏から有益なコメントを頂戴した。また、大学院の「英語学特講1」での議論も論点を整理する上で役に立った。受講してくれた学生たちに感謝したい。言うまでもなく本稿の至らぬ点は論者の責任である。

注

- 1) 格助詞と後置詞の中間にあると思われる「に」格については省略に対する容認性も揺れがある。また、

起点の後置詞「から」については、話題化が関与する場合には省略可能であるということが加藤（2003）で述べられているが、大久保（2013）は、それ以外にも「から」省略が可能な条件を論じている。

- 2) 高見・久野（2006）で提案されている機能的分析に関しては彼ら自身も次のように述べ、さらなる研究が必要であることを認めている。

「……我々の分析は、多くの例を的確に説明できるものの、まだ試案の段階であり、今後さらに多くの例を検討し、検証を重ねなければならない。」（高見・久野（2006: 212））

- 3) 益岡（2007）は「の」を形式名詞に含めている。
4) 最終的にはどのような文脈を想定するかの問題となる可能性は否定できない。この種の問題は生成文法ではよく話題にされてきた問題である。Newmeyer（1983）の第2章で、そのことが触れられてある。
5) Akaso（2013）では、この結果を受けて、非対格主語が影山とは異なり TP 指定部に移動するという主張をしている Kishimoto（2009）を取り上げて、影山（1993）と Kishimoto（2009）との分析を比較している。

参考文献

- Akaso, Naoyuki (2013) “On the Subject Position of Unaccusatives in Japanese: the Kageyama-Kishimoto Puzzle,” paper read in the 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics. Ithaca, NY (August 24th).
- 高見・久野（2006）『日本語機能的構文研究』大修館
- 竹林一志（2004）『現代日本語における主部の本質と諸相』くろしお出版
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 加藤重広（2010）「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学5』35-57.
- Kishimoto, Hideki (2009) “Subject Raising in Japanese,” *Proceedings of the Fifth Workshop on Altaic Formal Linguistics, MIT Working Papers in Linguistics* 58, 225-240.
- Kuroda, Shige-Yuki (1983) “What Can Japanese Say about Government and Binding?” *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics* 2, 153-164.
- Lee, Kiri (2002) “Nominative Case-marker Deletion in Spoken Japanese: An Analysis from the Perspective of Information Structure,” *Journal of Pragmatics* 34, 683-709.
- 益岡隆（2007）『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. Academic Press.
- Newmeyer, Frederick (1983) *Grammatical Theory: Its Limits and Its Possibilities*. The University of Chicago Press.
- 大久保庸子（2013）“On the Ellipsis of Japanese Particle *KARA*,” manuscript, Nagoya Gakuin University.
- Perlmutter, David (1978) “Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis,” *BLS* 4, 157-89.